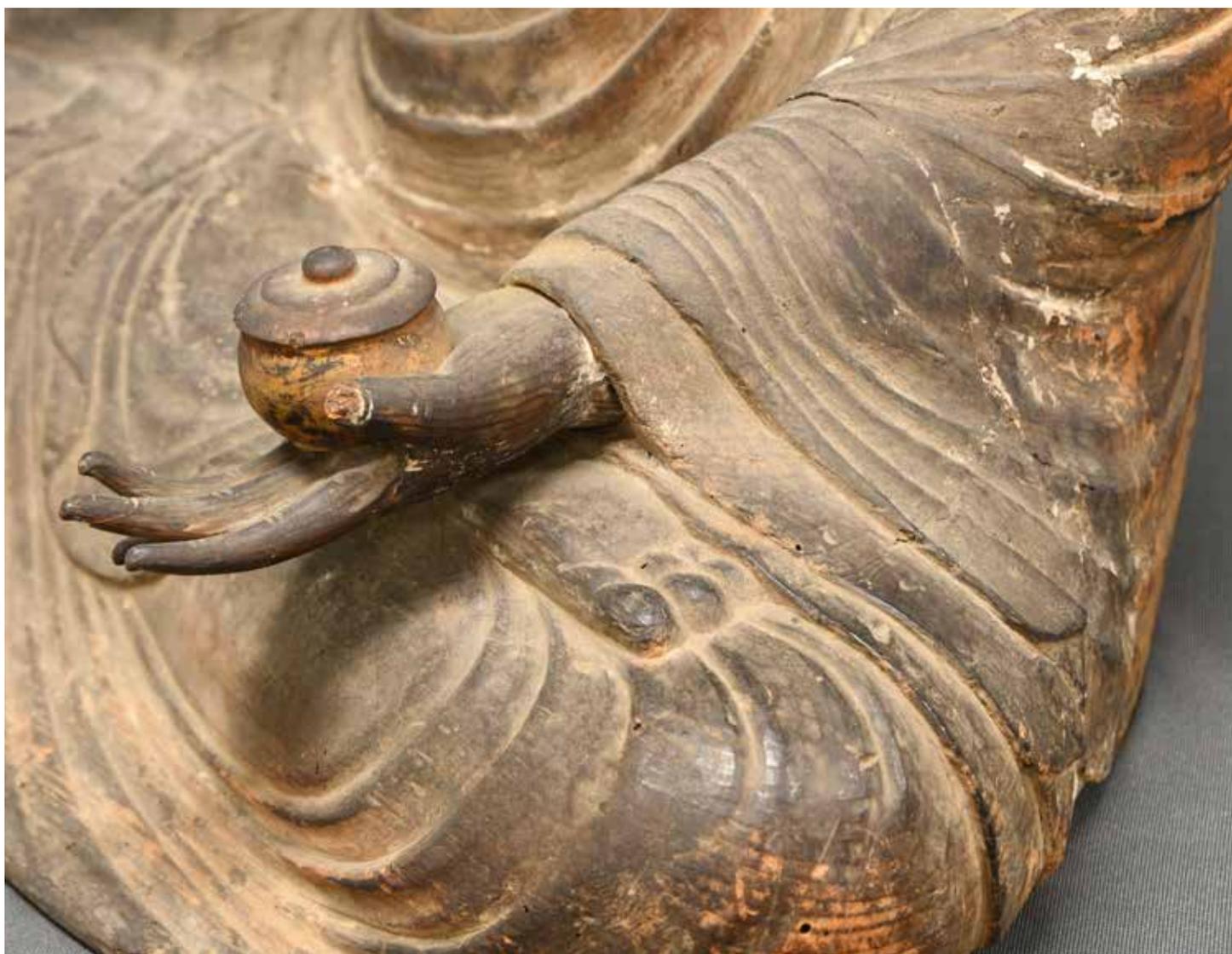


上原 美術館 通信

2019
spring



編集・発行 公益財団法人上原美術館
2019年6月14日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



上原美術館は上原仏教美術館と上原近代美術館の2つの美術館が、平成29年11月3日、一つとなって生まれた美術館。このたび仏教館では、昭和58年の上原仏教美術館オープン以来、現在に至るまで38年間にわたって継続して収集してきたコレクションの中から、上原美術館を代表する仏教美術を厳選して展示します。

本展の主役、薬師如来坐像は、昨年5月に新たにコレクションに加わった仏像。像高52.8cm、ヒノキの一材から頭部と体部をつくり、前後に割って内刳(干割れ防止のため内部を削り抜く手法)を行う、一木割刳造の像です。華奢な体軀、静かに瞑想するかのような穏やかな面貌が印象的な仏像で、平安時代後期、12世紀の仏像と考えられます。身にまとった袈裟は仏身に密着し、流麗な衣文は肉身の起伏に従い、盛り上がった部分ではところどころ消え入るほどに浅くあらわされています。このような姿は平安時代後期の仏像の特徴で、11世紀の大仏師・定朝の作風を継承するものです。9世紀末の遣唐使の廃止からおおよそ100年経た時代に生まれた定朝は、中国の影響下に開花した従来の日本の仏教美術の伝統を学び、遣唐使廃止後も継続的にもたらされた大陸文化をも十分に消化した上で、日本独自の様式である和様を完成させた仏師でした。本像に見られる繊細優美で穏やかな作風は、日本の平安時代の貴族たちに好まれ、平安後期に一世を風靡した和風の美なのです。

先ほど華奢な体軀といいましたが、本像の肉身は両胸にわずかなふくらみをあらわし、腹部と背中にかすかな起伏を作るほかは、量感に乏しく平板で、側面観からみた体の肉付きも薄く、骨格の上に筋肉がついた現実の人体を、写実的にあらわそうとする意識があまり感じられません。人体描写に基づき、量感の表現を重んじてきた西洋彫刻の伝統をうけた西洋彫刻史の立場から、従来、平安後期の仏像の評価が芳しくなかったのは当然かもしれません。一方近年、建築や室内装飾、仏像、仏画、仏具などが一体となって、信仰空間としての「場」を構成するという視点に立ち、仏教美術を見直す研究も盛んになってきました。この視点から見たとき、量感に乏しく平面的と評される平安後期の仏像は、実はそれ一つで自己主張しすぎるところがなく、全体の一部としての調和を生み出しているという説もあります。いずれにせよ、平安貴族が愛した穏やかで繊細優美な仏像は、その後も仏像の規範の一つとして、現代に至るまで、仏像の一つの主流となりました。本像に見られる美しさ、対峙した者の心を和ませられる

仏のまなざしは、日本人が好んだ和風の仏のすがたといえるでしょう。

平安後期の仏像の対極にあるように思えるのが、鎌倉時代の慶派の仏像です。量感と生氣に満ちた運慶の仏像は、平安後期と連続する時代の仏像とは思えないほどです。人体各部の肉付きを解剖学的といえるほどの確にあらわし、写実的な着衣に深い衣文を刻む鎌倉時代の仏像は、先ほどの平安後期の仏像の造形とは大きく異なりますが、現代の私たちの心を打つ、私たちの先人が生み出したもう一つの美のかたちです。本展では、当館所蔵の鎌倉時代の阿弥陀如来立像と大日如来坐像、松崎町吉田地区の吉田寺に伝えられた(現在は当館に寄託)、伊豆を代表する慶派仏師の作例とされる吉田寺阿弥陀三尊像(静岡県指定文化財)も併せて展示いたします。平安と鎌倉、二つの時代の美をお楽しみください。(田島)



《薬師如来坐像》平安時代(12世紀) 当館蔵

このたび近代館では、岡鹿之助《三色すみれ》(1966年)、オディロン・ルドンの版画《XI.突然三人の女神が現れる》(版画集『聖アントワヌの誘惑 第三集』より、1896年)、ジョルジュ・スーラ《ウェルギリウス》、3点の作品を新たに収蔵しました。当館で所蔵している岡鹿之助《赤い花》(1963年)とともに、これらの作品は染色家・志村ふくみ作品のコレクターとしても知られる佐久間幸子氏が旧蔵したものです。個人コレクションとして大切に愛蔵されてきた作品が、本展にて当館初公開されることとなりました。

佐久間氏は、美術蒐集で有名だった細川家第16代当主細川護立氏をはじめ、川端康成、梅原龍三郎など、錚々たる作家や画家、茶人、古美術商など、多くの数寄者、文化人と交流されてきました。その交流の中で、佐久間氏の鋭い審美眼はさらに磨かれ、蒐集されたコレクションは古美術から近代絵画まで多岐にわたります。佐久間氏が惚れ込んだ志村ふくみ氏の着物コレクション約60点は滋賀県立近代美術館へ寄贈され、同館が所蔵しています。また、2015年に老舗の古美術店である壺中居にて「小さな ちいさな 美の世界—佐久間幸子コレクション—」と題したコレクション展を開催、オリエントやアジア各地の小さな古美術品を公開し話題を呼びました。これら佐久間氏のコレクションは絵画作品から始まり、その中でも佐久間氏が敬愛してやまない画家の一人が岡鹿之助です。

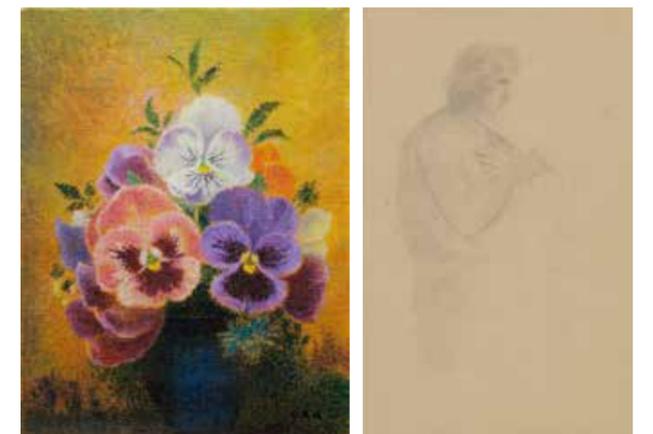
日本洋画壇を代表する画家として活躍した岡鹿之助(1898-1978)は、油絵具を筆に少量取り、カンヴァスの目を生かして、かすれるように絵具を置いていく独自の点描作品で知られています。静寂で詩情に満ちた絵画世界を生み出した岡が好んだモチーフの一つに花が挙げられます。その中でも、岡が最も好んだ花であるパンジーを描いた《三色すみれ》は、小品ながら華やかな明さを湛えています。50年ほど前、佐久間氏はこの作品と画廊で出あい、たちまち心を奪われました。《三色すみれ》を手に入れるため、自身の生活費を精一杯切り詰め、ようやく作品を手にすることが出来たそうです。そのことを知った岡は、佐久間氏が作品を入手したお祝いとして、ルドンのリトグラフ《XI.突然三人の女神が現れる》を直接彼女に贈りました。この小さなリトグラフは、岡がパリにある老舗の版画商からプレゼントされたという思い出の作品でもありました。それ以降、佐久間氏にとって《三色すみれ》は、岡が描いたパンジーの中で最も大好きな作品であるだけでなく、多くの思い出が込められた大切な一点となりました。

岡旧蔵のルドン《XI.突然三人の女神が現れる》は、フランスの小説家であるギュスターヴ・フロベール(1821-1880)が、着想から30年もの歳月をかけて書き上げた幻想的な小説がもとになっています。ルドンは1887年よりこの小説の造形化に着手し、第一集、第二集に続き、1896年には第三集がリトグラフで刷られました。今回ご紹介するリトグラフは第三集の一場面、異教世界に入り込んだアントワヌたちの前に三人の女神が現れるシーンです。簡潔な線で描かれた三美神からは、神秘的な雰囲気漂います。ルドンは岡が敬愛していた画家です。岡は本作を心からの謝意を込めて、岡芸術を愛する佐久間氏に託したのでしょう。

最後に、佐久間氏が愛蔵したスーラ(1859-1891)の素描《ウェルギリウス》をご紹介します。病弱だった佐久間氏は、読書を趣味とし、小さい頃からダンテ『神曲』を愛読しました。この長編叙事詩において、主人公ダンテの案内役として一緒に地獄を巡った人物が、古代ローマの詩人・ウェルギリウスです。佐久間氏は思い入れのある『神曲』の登場人物を描いたこの素描に一目惚れしたそうです。ウェルギリウスを描いた本作が放つ静かな佇まいは、岡作品と共通する精神性を感じさせます。

佐久間氏は、気に入ったらどんなに時間がかかっても自ら作品を購入し、大切に愛でてきました。この小さくも素晴らしいコレクションは、長い歳月をかけて自分の気に入った作品のみを蒐集し、形成された上原コレクションと類似しています。

小さいながらも、美しく輝く宝宝箱のように愛らしい、新たなコレクションをどうぞお楽しみください。(土屋)



岡鹿之助《三色すみれ》1966(昭和41年)

ジョルジュ・スーラ《ウェルギリウス》

平成30年5月から、町史編纂事業が本格的に始動した伊豆東海岸の町・河津町。上原美術館では河津町教育委員会の依頼を受け、河津町文化財保護審議会、河津町史編さん委員会、河津町仏教会と連携し、河津町内の全ての寺院に伝わる仏像・仏画全てを対象とした、仏教美術の悉皆調査を開始しました。平成30年6月4日の河津町見高・真乗寺調査を皮切りに、令和元年5月現在、河津町内の寺院16寺のうち9寺の調査を完了。今年度中の調査完了を目指しています。調査の成果は編さん中の河津町史に反映するほか、今後の上原美術館の企画展でも見出された仏像・仏画の展示を計画していきたいと思ひます。

今回は昨年11月26日に行われた、沢田地区の臨濟宗建長寺派の寺院・林際寺の調査で新たに見出された仏像をご紹介します。本像は林際寺の本尊で、像高69.6cmの地蔵菩薩坐像。構造は、頭体幹部(頭部と体の主要部分)をヒノキと思われる針葉樹二材を前後に寄せてつくる寄木造の像で、両肩以下の両体側にも左右ともに前後二材を寄せ、別につくった脚部と両袖をとりつけ、さらに両手首先を袖口に差し込んでいます。頭部は袈裟の襟際でノミを入れて一度割り外す割首とし、瞳には水晶製の玉眼を入れています。

本像の調査を開始したとき、面貌や構造、造形、やや背を丸めた体勢などから室町時代以前にさかのぼる可能性のある像と思われましたが、像底に空いた小さな穴から像内をのぞいたところ、体幹部材の正面下部に、「永徳二年三月七日□□□/同三月癸亥四月二十一日…(中略)…□□州法眼朝榮作之…(後略)」の銘があることが分かり、

南北朝時代の永徳2(1382)年、法眼朝榮によって造像された像であることが分かりました。「朝」の文字を名に用いる仏師としては、神奈川県鎌倉市・覚園寺日光・月光菩薩像や十二神将像(戌神を除く)などを制作した朝祐など、鎌倉で活躍した仏師が知られており、朝榮もその一人とする説があります。南北朝時代の作例では、応安3(1370)年の東京都立川市・普濟寺の物外可什像(近年焼失)に「仏師上総法橋朝榮」の銘をのこした人物が知られており、本像の作者と同一人物の可能性が有ります。

ところで本像に関しては、林際寺の本山である建長寺の塔頭、龍峰院から移されたものとする伝承があります。このことを傍証するのは林際寺が明和5(1768)年7月、本山である建長寺に提出した什物帳で、本尊地蔵菩薩の注記として「竜峰庵玉英和尚寄附」とあり、本像が鎌倉にある建長寺塔頭の龍峰院の住職によって林際寺に移された像であると記しています。ここで再び本像の胎内墨書に戻ると、前掲の年銘に続き、「開山住持方崖元圭□□」の名が記されていました。この名の後半には判読が難しい部分があるため、墨書の意図を正確にくみ取るにあたっては、さらなる検討が必要ですが、方崖元圭は

建長寺47世であり、ここにも本像と建長寺、そして鎌倉とのつながりを見ることができます。

平安仏を多く伝えながら、従来、中世の仏像は存在しないとされてきた河津町。今回の調査で、南北朝時代にさかのぼる本像をはじめ、室町時代の仏像が見出され始めています。それらの中には本像のように、河津町の禅宗寺院と鎌倉との深い関係をうかがわせる作例が散見されます。調査を通じて今まで知られていない新たな地域の歴史が明らかになりつつあります。



《地蔵菩薩坐像》永徳2(1382)年 朝榮作 河津町沢田・林際寺蔵

2019年2月24日、ドナルド・キーン先生がご逝去されました。日本文学の研究における偉大な功績は広く知られていますが、今回のコラムでは哀悼の意を込めてキーン先生と上原美術館のご縁を紹介したいと思います。

上原美術館の前身である上原近代美術館は2000年に開館しました。キーン先生は開館後、しばらくして美術館にご来館くださるようになりました。それはご友人である伊豆・下田の陶芸家・土屋典康さんご夫妻の案内によるものでした。キーン先生は30年以上前に東京の展覧会で土屋さんの作品と出あい、その後、毎年夏とお正月の2回、下田の土屋さんのお宅を訪ねられました。土屋さんの家は美術館の近くにあり、そうしたご縁からキーン先生も上原美術館に立ち寄ってくださるようになりました。

いつの頃からか、キーン先生がご来館されたときには学芸員がご一緒させていただくようになりました。キーン先生とご子息の誠己さん、土屋さんご夫妻

とともに何度も絵を楽しみました。絵というものには不思議なもので、一緒に見る人によってその見え方が変わります。キーン先生の率直な感想を聞きながら見ると、いつもの絵が生き生きと見えてきたことを思い出します。あるとき、戦中に描かれた梅原龍三郎《富士》を見てみると、キーン先生が終戦直後、アメリカ軍の船から一度だけ早朝に美しい赤富士を見たことがある、というお話を聞かさせていただきました。キーン先生がご覧になった富士山が目には浮かぶようで、時と場所を越えるような不思議な感覚を得たことを記憶しています。

キーン先生と一緒に絵を見ているうちに、いつか伊豆・下田で美術のお話をさせていただけないかと考えるようになりました。そして、2015年6月、上原近代美術館の開館15周年を記念して、下田市民文化会館にて特別講演会「私と美術、そして下田」を開催しました。

ご講演ではご専門の日本文学とは異なるお話をいろいろと伺うことができ

ました。キーン先生は中学生の頃、ニューヨークのメトロポリタン美術館よりもプライベート・コレクションを展示する美術館、フリック・コレクションがお気に入り、機会があれば毎週、訪ねていたそうです。あまり多すぎない作品をゆったりと見て、絵が「だんだん私の友達になりました」と仰っていました。こうした美しいものを見る体験が、日本文学に魅了される下地となっていたのかもしれない。

キーン先生が初めて美術をコレクションされたのは1945年、33歳のときでした。アメリカ軍の日本語通訳として中国に渡ったとき、ある日本人と友人になったそうです。彼は古い焼物のコレクターで、自分ではコレクションを日本に持って帰れないため、キーン先生にいくつかを譲り、代わりに食料や衣料を送って欲しいと言われたそうです。そうして手に入れた初めてのコレクションを通じて、次第に陶器をはじめ東洋美術に魅了されたといいます。そして、東京の展覧会でたまたま出あったのが土屋さんの器でした。ご講演の後半では、土屋さんとキーン先生に、「美」について対談いただきました。ご専門ではない美術のお話を伺っていると、キーン先生の感性の豊かさ、そしてその背景にある人間や文化への愛情を強く感じました。

キーン先生は昨年1月、リニューアル後初めて上原美術館にお立ち寄りくださいました。キーン先生のお仕事やお人柄に触れることができたことは上原美術館として、とても光栄なことでした。心より感謝の気持ちと哀悼の意を捧げたく存じます。



仏教館

特別展「伊豆半島仏像めぐり — 伊豆13市町の仏たち —」

近代館

企画展「画家たちの旅 — 梅原龍三郎、牛島憲之、ルノワールが見た風景 —」

会期：2019年4月6日(土)～6月30日(日)

当館では6月30日まで、静岡デスティネーション・キャンペーンに合わせて、旅にまつわる2つの展覧会を同時開催しております。

仏教館「伊豆半島仏像めぐり」は、伊豆13市町から1点ずつ選んだ仏像を紹介。それぞれの仏像がもつエピソードをたどりながら、伊豆半島を一周するような展覧会です。本展のポスターで登場している北條寺の観音菩薩坐像(鎌倉後期～南北朝時代・静岡県指定文化財)は、寺外公開が実に14年ぶりとなり、本展の見どころの一つ。ゆったりと岩の上に座り、流れるような衣の表現が美しいお像です。正面からでは見えない右手の様子も見る事が出来ます。

なお、かんなみ仏の里美術館蔵の観音菩薩立像、地藏菩薩立像(いずれも平安時代・静岡県指定文化財)は6月24日(月)までの公開となります。13市町すべて揃っている期間中にぜひご覧ください。

近代館「画家たちの旅」では、旅からインスピレーションを受けた絵画の数々を紹介しています。当館初公開となる牛島憲之《夕月富士》(1987年)は、牛島87歳の作で、山中湖の夕暮れに浮かぶ富士山が画面に淡く溶け込むような作品です。当館が所在する下田の白浜・板戸海岸を描いた《雨明かる》(1982年)や、スケッチブックもあわせてご覧いただけます。

また第2展示室では印象派の画家ルノワール《アルジャントゥイユの橋》(1873年)を展示しております。川に架かる鉄橋を機関車が通り過ぎていく様子は、当時の旅を想起させます。美術館で伊豆から世界をめぐるさまざまな旅の風景をお楽しみください。

なお仏教館・多目的室では両展覧会の内容をご紹介する映像(約17分)を放映しています。展示とあわせてお楽しみください。



展覧会カタログ発行のお知らせ

伊豆半島仏像めぐり

— 伊豆13市町の仏たち —

特別展の図録を発行しました。展示したすべての仏様の写真と解説が掲載されています。1冊500円で美術館受付にて販売しています。詳細はお電話(0558-28-1228)またはEメール(info@uehara-museum.or.jp)にお問合せください。



ミニ講座開催

上原コレクション名品選1に出展される薬師如来坐像にちなみ、薬師如来がどのような仏なのか分かりやすくお話しします。

演題 お薬師さま入門

講師 田島整(当館主任学芸員)

日時 7月31日(水)、9月7日(土) 13:30～15:00 ※各回とも同じ内容です

会場 上原美術館 近代館会議室

定員 各回40名 ※事前申込制。要入館券

参加方法 ①お名前 ②ご住所 ③お電話番号 ④参加人数(2名様まで) ⑤参加希望日を明記の上、郵便はがき、もしくはEメール(info@uehara-museum.or.jp)にてお申込みください。

学芸員によるギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会の作品を学芸員が解説します。

日時 会期中の毎月第3土曜日 11:00～/14:00～ 仏教館・近代館、約30分ずつ

会場 上原美術館展示室

参加方法 当日、仏教館にお集まりください。 ※要入館券



活動報告

教室作品展開催

- ◎写経・仏像彫刻教室受講生作品展 3月1日～3月5日 会場：旧だるま茶屋
- ◎デッサン・水彩画教室受講生作品展 3月14日～3月19日 会場：近代館会議室
- ◎日本画教室受講生作品展 3月22日～3月27日 会場：近代館会議室

平成30年度の各教室受講生作品展を3月に開催しました。受講生が1年間の成果を発表する場となるこの作品展には、多くの方にご来場いただきました。

写経・仏像彫刻教室では、般若心経を中心に書写した作品と、20cmほどの小さなお地藏様から1mほどの仏像まで、さまざまな力作が揃いました。

デッサン・水彩画教室は1年生から2年生までの静物や石膏像を描いたデッサン、3年生の水彩画が並びました。

日本画教室では、花や動物などを題材に岩絵具で描いたさまざまな作品を展示しました。

各教室の作品には受講生のコメントを付けて展示しました。コメントには、作品制作の際に苦労した点や、教室の楽しみなど感想が記され、来場した方々はあわせて作品を楽しんでおられました。



ミニ講座「伊豆半島仏像めぐり」開催 2019年4月22日、5月26日、6月2日

6月30日(日)まで開催の特別展「伊豆半島仏像めぐり」をより深く楽しむためのミニ講座を会期中3回開催しました。本展企画担当の田島整主任学芸員による出展作品の話や、伊豆各地に伝わる仏像を紹介しました。

講座には遠方からも多くの方がご来場くださり、講座後に展示されている仏像をじっくりご覧になっていました。



伊豆だより



梅雨の音が聞こえてきた下田では、港に面した小高い山にある下田公園で、あじさい祭を6月30日まで開催中です。広い公園内に咲く約300万輪の色とりどりのあじさいは、新緑の中に鮮やかな色を浮かびあがらせ、目を楽しませてくれます。

この時期、美術館の庭でもあじさいがご覧になれます。近代館入口近くのあじさいの生垣には、水色のやさしい色合いの花がご来館のお客様をお迎えしています。

当館ではあじさい祭と同じ6月30日まで、特別展を開催しております。7月6日より、当館のコレクションから薬師如来を中心に、仏教美術から近代絵画まで魅力あふれる上原コレクション名品選1の展示となります。(櫻井)

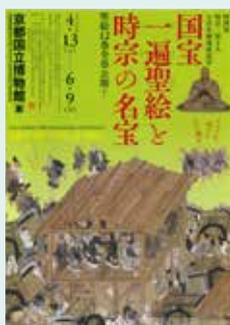
展覧会コラム



「ギュスターヴ・モロー サロメと宿命の女たち」

2019年4月6日(土)～6月23日(日) パナソニック汐留美術館

東京・新橋近くにあるパナソニック汐留美術館では、ギュスターヴ・モローの展覧会が開催されています。聖書や神話を多く題材とした象徴主義の画家として知られるモローは、ルオー、マティス、マルケなど新たな表現を求めた画家たちの師としても知られています。今回の展覧会ではパリのギュスターヴ・モロー美術館の全面協力のもと、油彩・水彩・素描など約70点が紹介されています。油彩スケッチの生々しい色彩の輝きからは、モロー芸術の美の秘密と、新世代の芸術家を育んだ自由な感性を垣間見ることができます。母や恋人との繊細で温かい交流など、新しい芸術家像が見られる展覧会です。東京会場の後、あべのハルカス美術館、福岡市美術館に巡回します。(土森)



「国宝一遍聖絵と時宗の名宝」

2019年4月13日(土)～6月9日(日) 京都国立博物館

鎌倉時代、阿弥陀如来に帰依し、全国を旅して民衆救済を目指した僧、一遍いっぺんがいました。のちに一遍の教えは時宗じしゅうという宗派として形成されていきます。京都国立博物館では、一遍上人しょうにんを引き継いだ二世上人、他阿真教の七百年大遠忌を記念して、時宗の名宝を一堂に集めた展覧会が開催されました。

本展の見どころは、何と言っても国宝・一遍聖絵全12巻の全巻公開がされたことでしょう。一遍の事跡を追っていくこの絵巻は、一遍上人が遊行する様子や、当時の人々の生活の様子が、細やかに描かれています。なお展覧会図録では一遍聖絵の全場面や、部分を拡大した図版も収録されています。また仏像は歴代上人の姿を写したりアルな肖像彫刻ちんぞう(頂相)や、快慶の弟子、行快ぎょうかいが造った阿弥陀如来立像なども公開されました。会場では年表などで時宗の歴史が丁寧に解説されていました。(櫻井)

次回休館日は2019年7月1日(月)～7月5日(金)です(展示替えのため)



上原美術館
Uehara Museum of Art

開館時間

9:00～17:00

最終入館は16:30まで

休館日

展覧会会期中は無休

展示替え日のみ休館

入館料

大人/1,000円、学生/500円

高校生以下無料 *団体10名以上は10%割引

表紙写真：《薬師如来坐像》部分 平安時代(12世紀)当館蔵 上原コレクション名品選1より
左手に薬壺を持つ薬師如来。体に沿うような浅い流麗な衣は本作の見どころのひとつ。